テールライター

セメント・コンクリート誌　2001年5月号

■ANA61便は30分遅れで羽田を離陸した。シートベルトのサインが消えた。しかし、再度サインがでる。その警告音があるインターバルでなり続けるのが気になる。しばらくして、乗り合わせた非番のパイロットが急ぎ足で前にいく。機内TVは離陸時と同じように海を映している。何かあったのだろうか。一向に上昇しない機体に私の不安が募る。それに気がついたのかスチュワーデスが私のところに来る。そしてハイジャックされていることを告げた。

機内TVは相変わらず海を映している。富士山が左に高く見える。「何でこんな所に富士山があるんだ！何でこんなに高度が低いんだハイジャックならこんなに低く飛ばないだろう！機体の故障でどこかへ不時着しようとしているのでは・・・。」我々の気持ちはハイジャックよりもそちらに向けられた。「降下している！」誰かがそう叫んだと同時に機体が大きく揺れ急降下する。TVの映像は完全に傾いている。私の頭の中は真っ白な状態で、心臓の鼓動だけが極限に達している。

「犯人をとりおさえました！これから羽田に戻ります！」操縦席からの知らせを聞いて自分を取り戻したようだ。「羽田だ！滑走路だ！まだまだ！ようしそこだ！」まるで自分が機長になったかのように・・・。そして機内には大きな歓声と拍手が沸きあがった。非番のパイロットがいなかったら・・・。
勇敢に犯人に立ち向かった乗客がいなかったら・・・。時間が経ち、情報がおおくなるにつれて、恐怖感が増してくる。

（セメント・コンクリート1999年10月号）

130円 7・25 日刊 サツポロ daily tabloid

乗っ取り犯の狂気

問題はこんな男がいとも簡単に大事件を起こせたこと

羽田は警備が甘くどんな凶器でも持ち込める

函館競馬 枠順確定

墜落寸前だった全日空機 乗っ取り事件の恐怖

狂気の包丁男に操縦桿握られ乗客503人あわや大惨事

麻雀

検証の 秀才の犯行に近所もア然

犯人は武蔵高→一橋大卒の超エリート

高校時代は物理部で鉄道マニア

「空港警備甘い」と事前に投書

なぜ持ち込めた

コックピットへの侵入も謎だらけ

セキュリティーの盲点つく

文化包丁

1999年7月23日、高校の先輩でもある北海道大学の鎌田英治教授の葬儀のために札幌へ向かう途中の事故である。同乗者は、福士勲氏と戸田和敏氏である。この新聞は、札幌駅で私の写真が中央に掲載されているのを発見して購入したものである。

ニッポン人・脈・記　飛行機雲　見上げて②

危機に跳び越えた原則

朝日新聞2007年9月14日（夕刊）

■「地震の恐ろしさを身にしみて感じた。わずか10秒の出来事とは思えない。はじめて大災害の中に立ったとき何故か涙がボロボロ出てきた。何も手助けできない無力さを感じる。とにかく頭をガーンと打たれた感じだ。教訓というにはあまりにも大きな犠牲である。テレビで原因を指摘する専門家の意見もむなしく聞こえる。」 これが1995年1月17日の阪神・淡路大震災の直後、現地調査に派遣された研究者の報告書に記された言葉である。この言葉を読んで今でも何故か目頭が熱くなるのは私だけでしょうか。

多分小学校2年生のころでした。大地震が我が小学校を襲った。「地震だ！」誰となく叫び声をあげ、女性教師の悲鳴に近い誘導を振り切り、あわてて窓から外に飛び出す。校庭の地面が波打ち、まともに歩くことができない。ガラスが割れ、立ち木が裂け、地面が割れ、近くの発電用水路の水も溢れだす。それは、1952年3月4日、M8.2、死者行方不明33名の十勝沖地震だったのです。その恐ろしさは幼い少年の心にしっかりと焼き付けられたのです。その影響でしょうか、私には様々な出来事に対する迅速な対応と果敢な勇気とが無意識のうちに育まれたような気がします。」

（セメント・コンクリート1997年8月号）

■いま、甲子園では選抜高校野球の真最中である。我が母校は30年ぶり5回目の甲子園である。「4番、センター和美君、背番号8」鶯嬢の声に、真っ黒に日焼けした顔が極度の緊張のためか青ざめて見える。ロジンでグリップの滑りを止める。1回、2回と素振りをして右バッターボックスに入る。バットを構える位置が定まらない。何か動作がぎこちない。スタンドの歓声で監督の指示も聞こえない。9回裏、ツーアウト満塁、一打逆転のチャンスである。ピッチャーはあの柴田である。スライダーだ！おもいっきりバットを振った・・・・・。私は校歌を聞くこともなく夢からさめた。

高校2年生の秋、5年ぶり2回目の選抜甲子園を目指して全道大会にのぞんだ。名門北海と準々決勝で対戦、事実上の決勝戦であった。北海は、あの谷木（元中日）が一番、松谷（元東映）が主戦投手、そして吉沢（元巨人）が控え投手というように、それはそうそうたるメンバーであった。私は、その松谷から4打数2安打、1打点をあげた。彼の北海道での唯一の失点である。前半有利に試合を運んだものの、北海の壁はやはり厚かった。北海道新聞に“苫東、善戦及ばず”とそのことが記されている。

いま、地域の少年野球の監督を引き受けて5年になる。将来、子供達が初めての甲子園へ連れて行ってくれるのを夢見て・・・。

（建築技術　1998年6月号）

全道大会（札幌中島球場）

これらは，本誌ほかに執筆した編集後記（テールライト）である。そして，その内容は編集方針や記事と何ら関係がない。

編集後記は，編集を担当した人がその結果の出来栄えや苦労話を書くのが一般的である。しかし，興味をもってそれを読んでくれる人は極めて少ない。たくさんの広告の後にうずもれ，人目に触れることも少ない。それなら別に忠実に編集の苦労も書く必要もないと考えた。そうすれば原稿内容をいちいちチェックすることもないし，期限遅れの原稿をいらいらして待つこともない。その時々に自分の身の回りに起きた現象を忠実に記録できる格好の場所として利用させていただいた。男の秘密日記は陰険で，好ましいものではない。だから，わずかな人であっても読んでいただいているのだということを意識して言葉を選で書いたつもりである。800 字程度であるけれども，かなり楽しんで書けたし，満足している。

編集部から‘ずいそう’に何か書いて欲しいとの依頼があった。久しぶりに人目に触れるところに自分の考えが書けると，感敵のあまり二つ返事で依頼を受けた。しかし，題材を考えていくうちに，ほとんどのものが既発表であることに気がついた。私は，ただのテールライターだったのです。